24日から地元常滑ボートで「SGチャレンジカップ」初参戦

岩瀬裕亮 GP初出場へ 虎視眈々



「第29回SGチャレンジカップ」が24日から29日まで、愛知・常滑ボートで行われる。年末の大村グランプリ出場をかけての大一番。地元愛知支部からは池田浩二、平本真之、磯部誠、岩瀬裕亮の4人が参戦。その中から岩瀬にスポットライトを当てる。デビューから17年目。今年は初めてGⅡ、GⅠを制するなどキャリアハイの成績を残す。まだ見ぬ世界、賞金ランク18以内を目指して初のチャレンジカップに臨む。

インタビュー企画

スタート事故

岩瀬裕亮は09年4月に106期生としてやまと学校（現・ボートレーサー養成所）の門をくぐった。この106期から受験資格が変更となり、年齢制限の緩和（21歳未満から31歳未満）、さらに特別試験枠を新しく設けた。より有能な人材を求めるべく門戸を広げたことで、応募者数は1期前、105期の623人から1705人と約3倍に増加。その中から40人が入校した。子供の頃から祖父にレース場によく連れて行かれたこともあり身近に感じていたボートレース。そしてバイクを趣味とし、モータースポーツに造詣（ぞうけい）が深かったこともあり順応性は高く、卒業した22人の中でリーグ戦勝率はトップの8・22をマーク。また卒業記念競走で優勝と傑出した成績を残して10年5月1日、蒲郡でデビューした。

鳴り物入りだったこともあり、頭角を現すのも早かった。13年10月の児島で初優勝、その年の優秀選手表彰では最優秀新人に選出されるなど、このままトップレーサーへの階段を順調に駆け上るものと期待は大きく膨らんだ。ところが、思わぬ壁が立ちはだかる。スタート事故だ。デビューから16年の間で20本のフライング。肝心なところで無理な仕掛けをしてしまうことが少なくなく、回り道を余儀なくされていた。「自分としては、前評判の高さが先行しちゃってるなという気持ちがずっとありました。やまとで結果を残したのはいいけど、デビューしてからは結果が残せていないので」。タイトルに手が届きそうで届かない…。歯がゆさを感じずにはいられなかった。このままでは埋没しかねなかった資質が26年、ようやく開花する。1月のびわこGⅡ秩父宮妃記念杯を5コースからまくり差して特別戦初制覇。さらに6月の宮島72周年でGⅠ初制覇。デビュー17年目で待望のGⅠウイナーの仲間入りを果たした。「ずっとA1でいられたしチャンスはあったけど、タイトルを取るのにすごく時間がかかりましたね」。11月16日時点での獲得賞金額は約6800万円で賞金ランクは20位。初のグランプリ出場が手の届くところにきている。タイトルを取ったこともそうだが、ここまでスタート事故がないことも、この位置につける要因のひとつに挙げる。「それが一番大きいですね。自分の中では耐えたと、いう感じです。勝負できる時に勝負しようという気持ちでやってきて、抑えるところは抑えられているので、望みはつながっているのかなって。（グランプリ出場へは）ワンチャンどころか、結構チャンスはあると思っています」。

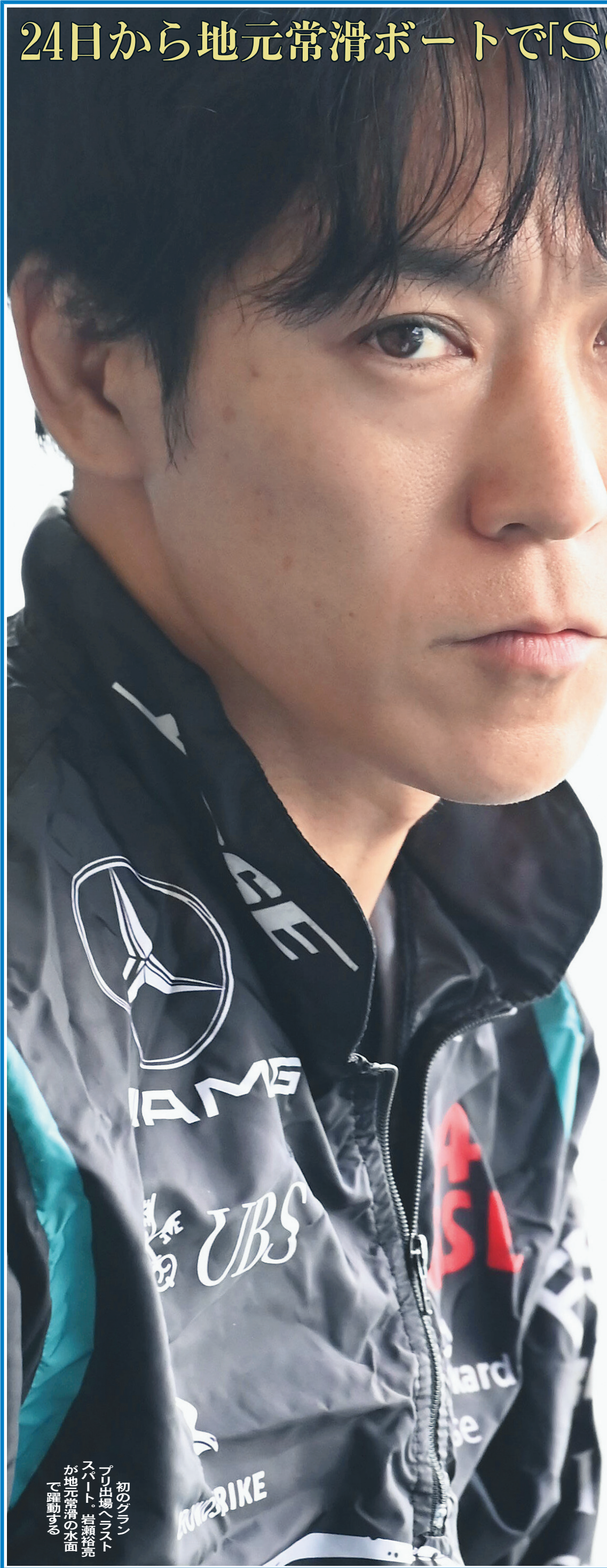
ようやく開花

まだ見ぬ世界

チャレンジカップの舞台は常滑。地元でもあり、常滑でのSGは初参戦。気合は相当なものかと思いきや、さにあらず。普段通りのスタンスを強調する。「やれることを精いっぱいやって、チャンスのある時に取れるようにしたい。目標は優出。グランプリに行けるようにしたいですね」。自身にとっての天職だと口にするボートレース。これまで少し遠回りをしたとはいえ、一握りの選手しか立つことのできないステージに踏み入れようとしている。「タイトルを手にしたことが、より上を目指すいいきっかけになりました。まだまだ見えてない景色がいっぱいありますからね」。早熟かと思いきや、実は大器晩成。遅れてやってきた俊英がマネーバトルに旋風を巻き起こす。

「ワンチャンどころか結構チャンスはある」

◆岩瀬裕亮
（いわせ・ゆうすけ）1988年（昭63）6月11日、愛知県生まれ。養成所106期生として、10年5月蒲郡でデビュー。同年6月戸田で初勝利、13年10月児島で初優勝。今年6月宮島でGⅠ初優勝。同期は今井美亜、森野正弘ら。163㌢、53㌔、血液型A。



初のグランプリ出場へラストスパート。岩瀬裕亮が地元常滑の水面で躍動する